



Vol.8

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソソコ de ソソコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソソコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

知床(シレトコ)



先日のこと、地図を見ていた高校
生から「知床ってどの辺？」と聞かれ

たので「この地図だと小さくてわかりにくい
からこつちへ。」と学習室へ。白老町内のアイ
ヌ語地名パネルを指差し「ここが知床。今の
JR 萩野駅あたりは知床って呼んでいたんだ
よ。」って言うと、その高校生が「へっ!?」って
顔をしたんだよね。神戸から来た彼女が知り
たかったのは世界自然遺産に登録された「知
床」。展示場に「戻り」ここが知床。アイヌ語で
シリェトク、大地が突き出ている所、海に突き
出た岬という意味なんだよ。」と説明したら
「知床って「つじやないんだ。」って。

白老の知床は、低い丘陵が海岸近くまで伸
びた先端部の地名。現在は、丘もすっかり削

り取られていて地名の由来をイメージできな
いから何となく寂しいけど。

白老の川名にはマクンベツやフシコベツ、イ
シカリベツ、シベツ、ホロナイなどがあり、漢字
を当てればどれも馴染みの地名だよ。アイ
ヌ語地名は地形の特徴や目印になるような
名前が付けられるから、同じ特徴があれば地
名が同じなのは当然。アイヌ神話に由来する
地名も多く、国造りの神が尻餅をついたオソ
コ(尻・跡)や鯨似の怪魚を退治し、その頭を
神へのお礼に置いたというフンベサバ(鯨・頭)
も近くにあるから、アイヌの世界観を想像し
ながらアイヌ語地名を歩くのも楽しいよ。

でも優子さん、北海道の地名はほんと読み
にくいし難しいよね。



うん、難しい。
でもなんだか

楽しいよね。道東の大
楽毛なんて最高。オタ
|| 砂浜、ノシケ || 中央
|| 意味で、釧路と白
糠に続く砂浜の中は
どだから。そういう場
所は各地にあるけど、
多くは日本語の浜中
とか中浜に変わったと
のこと。アイヌ語のま



ま、あちこちにオタノシケが残ってたら、どん
なに「お楽しいけ(笑)」!

雨竜町の面白内川(オ||川尻に・モシリ||
島・オ||ある・ナイ||川)や渡島の可笑内川
(オ||川尻に・カシ||飯小屋(がある)・ナイ||
川)も、語源のわかる立派なアイヌ語地名だ
けど、なんだかクスツって笑っちゃう。

ただ、アイヌ語の語源を考えるのはとても
楽しいけど、落とし穴もあるの。アイヌ語はた
った1つの音でも単語として意味を持つこと
が多いので、なんとも解釈できちゃう。だか
らこそアイヌ語文法の知識が必要だし、地名
研究の方法論も勉強しなくちゃいけない。ま
ずは、アイヌ語地名の研究では今でも多くの
人が第一人者だと認めている山田

秀三先生の著作がオススメかな。
例えば札幌では、アイヌ語地名
の学習が、小学校のカリキュラムに
組み入れられたのは一九八〇年代
半ばのこと。今では、北海道の地
名の多くがアイヌ語に由来する
ということ、道民の常識だよ。こ
れは、先住民族としてのアイヌの
人々を理解するうえでも、とって
も重要。

で、最後に「アイヌ語地名を学
んだら北海道の旅はもっと「お楽
しけ〜!」(おそまつ)

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌの子どもへのアイヌ語教育に携わる。

■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。(財)アイヌ民族博物館 専務理事。先住民族アイヌの一員として、アイヌ文化伝承と普及啓発活動に努める。